

---

陽炎 ~ KaGeRoU ~

Yamato

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

陽炎 ｝ KaGeRoU ｝

### 【Nコード】

N7479Z

### 【作者名】

Y a m a t o

### 【あらすじ】

僕の理想の人なんて、この日本にいるわけがない・・・と思っている学生にある日、突如として出会いが訪れる・・・しかしその人は、一体どういう人なのか、どこに住んでいるのかさえもわからない・・・まさに神出鬼没。「僕」はますます翻弄され、心をつかまれていくのだった・・・

## 蝉しぐれ(前書き)

ボーイズラブの要素を含みます。が、絶対にそちら側、というわけでもなく、主体的には耽美文学たんびぶんがく様に楽しんでいただけよう書いています。たまたま好きになってしまった人が同性だった・・・という設定です。

## 蝉しぐれ

僕は坂の上にある住宅街に住んでいる。両親と姉と僕の四人家族。よくあるサラリーマン家庭の、よくある建売り住宅に住んでいる、よくある家族にすぎない。

僕は今、大学3年。ようやく夏休みに入ったところ。

ある日の午後、僕は駅前の人気パン屋のバイト先から歩いて帰ってきた。

人気があるのかないとか、そんなことなどまったく考えずに応募して、しかも家から歩いて通えるということとで、早々に採用が決まってしまったので、夏休みが始まって以来、毎日息つく間もないほど忙しい。

しかも、家は坂の上。だからって、市バスに乗ってしまったら、ほぼ毎日のバス代で一ヶ月に5000円はとんでいく。そんなのは考えただけでバカらしい……。

バイトの汗の上に、さらに汗だくになって、はあはあ言いながら坂道を登る……そんな毎日だった。

ある日の午後のことだった。

汗にしみる目を遠くにやると、坂道の向こうのほうから一台の自転車がやってくるのが見えた。

一台の紺色のロードバイク。

そして、そのペダルから伸びているのは、ベージュ色のモカシン、そして白く見えている足……は、けして頑丈ではない骨格を思わ

せる華奢なくなるぶしだった。

それがペダルをこぐたびに、濃紺の細めのジーンズの裾から見えたり隠れたりしていて、そのたびに真夏の光を反射させている。

颯爽と切る風に心もとなく揺れ動めく白いＴシャツは、薄手ながら上質の木綿にちがいがなかった・・・

そして、踊るように風にもて遊ばれる金茶色の絹の髪は、光の渦に溶けそうなくらいに煌めいている・・・。

僕はその人を、何もかもはばからず、じつと見てしまった。

遠くからやってくるそのさまを、一瞬も見逃すまいと、つぶさに

・

もしかして、僕の理想をすべて兼ね備えている人なのだったら、

どんなに素晴らしいか・・・

でも。

今までに、いったいそんな人に巡り会ったことがあるだろうか・・・  
顔や姿がどんなに素敵でも、雰囲気のない人にはなぜか、惹かれることは絶対にと行っていいほど、僕はない。

でもああ、その人が、自転車のハンドルにその身を委ねて、木陰を走ってくるさまは、僕の理想の憧憬にも似た景色だった。

まるで、いつか見た甘く切ないバックミュージックにむせかえるようなイタリアの恋愛映画のワンシーンのような・・・

まるで、ローズマリーやバラやラベンダーやクチナシや・・・と  
いった匂やかな花々の香りがそこらじゅうに立ち込めるような・・・

そんな薫りけむるように僕には見える風の中を、その人は泳ぐよ

うに、飛ぶように、近づいてくる。

そして、僕とすれ違った・・・

手を伸ばせば届きそうだった。でも、伸ばしたら、瞬間に消えてなくなりそうなの、そんな儚い夢のような光の中に、その人は瞬く間に通り過ぎていった。

僕は急いで後ろを振り返って見てみた。

もしかして、今は僕の妄想だったのだろうか・・・

急いで・・・本当に、急いで振り返って、見た。

それなのに、その人の姿はもう、なかった。

あとには、夏の午後の光に照りつけられる真っ黒なアスファルトがだるそうに横たわっているだけ。

セミの大合唱をつんざくように反射させながら・・・

僕は、その場から動けなかった。

僕の額からこめかみにかけて、すうつと汗が流れ落ちるのを感じた・・・

セミは、その間も休みなくずっと、鳴き続けていた。

「どこへ行ってしまったんだ・・・」

あの人は。

それからだ。

大学の行き帰り、いつでも誰かを探すような目をするようになったのは。



## 夕風

「ただいま・・・」

昼間は、誰も家族のいない自分の家にようやくたどり着いた。両親は共働き、姉は社会人だから当たり前か・・・

ドアを後ろ手で閉め、その手で鍵をかける。米国製のその鍵は、日本製みたいになめらかなにはかからないから、いつでも腕全体でかけなければならぬ。だから、鍵をかけるだけのために、ちよつと姿勢が斜めになるのは毎度のことだ。

自然石がコンクリートの中に均一な間隔をもって埋め込まれた玄関の三知土たたきは、ひんやりとしていて、僕の火照った顔や体を優しく鎮めてくれるようだった。今日は特に、ひんやりとを感じる。いつになく、あまりにも肌が上気してしまっているせいだろうか・・・。外界とあまりにかけ離れた気温の差異に、頭が少しボウッとした。

何気なく、ドアの脇に置かれている備前焼の金魚鉢をじっと見下ろす。青々とした小さな葉の水草が鉢底から伸びてきているのがわかる。その葉の間にメダカが十数匹泳いでいる。黒っぽい、肌色っぽい・・・メダカとはいえ、よく見てみると微妙に色合いが違うものだ。

見ていると、黒っぽい小さなメダカがついと泳いで、肌色っぽい大きいメダカに近づいた。すると、肌色のはサツと身を翻して、水草の影に隠れた。あつという間に、影も形もなくなった・・・。

黒いメダカはそこにポツンと取り残される。

僕みたいだ。

この黒い小さなメダカはさっきの僕だ。

あの人は、あっという間にいなくなってしまうていた。

僕はできる限り、素早く後ろを見たはずだ。  
なのに……

あの人の自転車が坂道を下り、少し先のカーブを曲がって消えていく、そんな何秒かの間でさえ、僕は自分をコントロールできないくらいに、常軌を逸してしまっていたというのか。

有り得ないそんな自分のぼやけた状態に、なんだか自分で恐ろしくなった。

そんな恐怖を払いのけようとするかのように、僕は足早に洗面所に行つて、着ているものを乱暴に脱いだ。汗が衣服にすっかり染み付いて、ベツタリと肌に張り付く。乱暴にしようとするから余計に手間取る……

やっと、湿った衣服が自分の体から離れて、僕は浴室に踏み込み、素早くドアを締めた。間髪いれずにシャワーのコックをひねる。まるで、恋人との逢瀬を今か今かと待ちわび、一刻を急いでいる若者のように……

いや、そんなことは有り得ない。  
まさか。

あの人とよしんば再会できたとしても、そんなこと。

あの人と会うために……なんて、考えただけで心臓がバクバクして胸が破裂しそうで、切ないくらいに苦しい……

僕は、立ちのぼる湯の煙の中になだれて、ただ呆然と、首筋や背中をシャワーに打たれていた。

「あの人に会うためだけにシャワーを浴びる」・・・

なんてことを・・・。

出会ってからちょっとしか経っていないあの人の逢瀬を、もう僕は想像してしまっているのだろうか・・・

普段の僕の性格からしたら、誰が見たって、そんなだいたいそれたことを想像しているようには、きつと見えないに違いない。

大学の校門の前で近隣にある女子大の学生が待っていることがある。うちの大学の派手なヤツと付き合っているんだらう、大方。そして、そういう事態にはけっしてならないのが僕みたいなタイプだ。たとえば、女の子と喫茶店や学食なんかでしゃべったりして時間つぶしなんかしようというとき、どんな話をしたらいいのか、悩んでしまうのだ。女の子がしゃべってくれるならまだいい。

大人しい子だともう、自分の専門分野の話・・・電気関連の話・・・たとえば光ファイバーがどのような構造になっているか、とか、光はどのくらい早く進んで、宇宙にもしも飛び出したら何秒間でどの星まで到達するか、とかそんな話で終始してしまうのだ。こんな話普通の女子ならあまり好きではないに決まってる・・・

そして、いつの間にやら僕はまた一人になっている・・・という算段になるのはわかりすぎるくらいわかっていているわけだ。

大学の校門前に「待たせて悪い」なんて、かっこよく登場するなんて、僕には卒業するまで、いや、卒業したって、到底無理な話だらう・・・

一旦、自信をなくしかけると、とことん自分を自虐的に落とし込んでいくのも僕の悪い癖。

「あの人と、いつそのこと、もう二度と会えない方がまだいい……」

本当なのか？

そんなこと言って。

自分で呟いて発した言葉に、自分の心が問いかける。

……本当に二度と会えなかったら？

頭を左右に二、三度振った。

水しぶきが浴室の壁に当たって、小さな跳ね返り音をたてた。

おもむろに、シャンプーのポンプボトルのレバー部分を勢いに任せ、ぎゅうと押した。

そして、両手のひらにシャンプーをこすりつけ、頭をかきむしるように泡を立て始めた。

あの人の面影を振り払うように……

そして、あとはもう適当だ。

頭が脂臭いってというのが僕は嫌だから、出かけて帰ったすぐあと念入りにするのは、いつもシャンプーだけ。

いいんだ、また寝る前にシャワーするんだから……

トランクス一枚でぶらぶら台所に行く。両開きドアのついた冷蔵庫庫を片方だけ開け、炭酸水の２リットル入りのペットボトルを取り出す。いわゆる、ウイスキーとかのソーダ割りを作るときのヤツだ。味もへつたくれもない。

両親が夜、二人で飲むときのために常備してある。でも、甘くないくて後味がサッパリしているから、僕も結構密かにジューズ代わりに飲んでいる。

コップになみなみとついで、ゴクゴクと一気に飲み干す。また、ついで飲み干す。

三回目についだ分は、自分の部屋に持っていくことにした。ベットボトルを元の場所にしまって、ドアを後ろ手で閉めた。

僕の部屋は二階にある。

窓からは、裏手に見える小高い山の木々が見えている。その木の葉の間からは近所の家々が、色とりどりの屋根をちらちらと見せていた。

西北向きのその部屋は、夏でも気温はそれほど上がりにくいのが僕は嬉しかった。冬生まれの僕はどちらかというと、冬の寒さより夏の暑さのほうがこたえるからだ。

僕のこの部屋だったら、今日みたいな真夏日だって、フローリングの冷たい床にじっと寝転がって、扇風機でも回していりゃ結構しのげる。同じ二階でも、東南向きの姉の部屋や、南向きの両親の部屋は、夏日にはカンカン照りにさらされ、どうしたって僕なんかいられる状況じゃあない。

けして広くはない部屋の床の真ん中に長々と寝そべった。バイトで疲れた体をこうして、ひんやりとするフローリングに伸ばすと、心地よさが芯から広がるようだ。

しばらくすると、片肘を付いて、横寝し、持ってきた炭酸水をチビチビと飲んだ。さっき、あれだけガブ飲みしたのだ。もう喉は、そんなに欲してはいなかった。

その代わり……。

振り払おうとすればするほど、僕はあの人の放つ光の中に引き込まれていつていた。

あの人がもしも、僕に振り向いてくれて、そして、あの人の瞳の中に僕が入っていいんだとしたら・・・

そして、僕のことを気に入ってくれるんだとしたら・・・

僕はいつの間にか、あの人の髪の毛の中に顔をうずめているような気持ちになっていた。

実際には、ついていた自分の肘をいつの間にかうんと伸ばして、その二の腕の上につつぶしていただけだ。

自分の髪が唇に触れるのを、あの人の髪だと想像しているにすぎなかった。

・・・あの人の頬に自分の唇を近づける・・・

そして、その陶器のような滑らかな頬から、下の方へ唇を這わせていく・・・

華奢な顎の骨にそって唇を沿わせていくと、ついにあの薔薇の花びらのような、ぷっくりとした艶めく口元を僕の唇が包み込む・・・

突如、はっと目を開けた。

あり得ない・・・そんなこと。

想像しただけでこんなに胸がドキドキしているのに、本当にそんなことになったら僕がどうにかなってしまいそうだ・・・

ふと見ると、さっきの炭酸水の入ったコップ一面に露がついていた。北向きで過ごしやすい部屋だと言っても、やはりそれだけ暑いのだ。露は、あまりにも密度濃くついていて、耐え切れずに流れ落

ちていた。

思わず僕は、あの人から放たれる光の中へと、落ちていった。果ててしまうまで、僕の周りのすべてが、凧いでいるようだった。

それでも、セミの大合唱の中に、時折、ひときわ美しいひぐらしの聲が混じるのを聞いていた。

オレンジ色が強くなりつつある午後遅い日の矢が、僕の部屋の窓へも差し込み始めていた。

もうすぐ母が帰ってくる。

僕はノロノロとベッドの上へ移動した。

そして、壁の方をむいて目をつむった。

僕だけの夢を壊されないように……。

ひぐらしの聲が、木々の間をぬうように、響き渡っていた。



ってしまいそうで。それであの人への想いを自ら断ち切ってしまい  
そうで・・・

なんて馬鹿なんだろう。甘美な夢の続きを見ようとしてベッドに  
横たわっていたというのに、こんな気持ちになっってしまうなんて・

「ヒーロー、ご飯よー」

母が呼んでいる。

「はい、今行く」と言っただけなのに、声がかすれてそれほど大きく  
は出なかつたらしい。それでも、返事は階下に聞こえたものと僕は  
思いこんで、床に転げたコップを直し、溢れたそれをティッシュで  
拭き取っていた。

「浩明ー！ ご飯ー！」

今度はちよつと険のある言い方が二階にまで響いてくる。窓はお  
そらく開け放たれて、全部網戸になっていているだろうから、そんな乱  
暴な言い方をしたらご近所に丸聞こえだよ・・・と、いつもの母の  
「よそ行き」の声を思いながら、コップを持って降りていった。  
気持ち、急いで来たという風を装いながら。そうでもしないと、あ  
とでどれだけお小言を言われるか・・・

コップを持ってダイニングに入っていくと、母がもう自分の席に  
ついていて。ということとは、しばらくは僕のくるのを待っていたに  
違いない。母はたいてい、出来たおかずを体よくよそいながら、夕  
飯の準備ができたことを家族に知らせる。それでもなかなか家族が  
来ないときには、料理に使ったもろもろを洗って、片付けながら待  
っている。首尾良く家族がそろえば、洗い物の立ち仕事を途中でや  
めて、一番あとから席につく。それなのに、すっかり洗い場はきれ  
いになっていて、椅子に座っているのだから・・・

「じめん・・・」

そう言いながら、コップを素早くシンクの中に押し込むように置いた。そのコップを母に見られるのがなんだか嫌だったから。

「さつきから呼んでるのにもう・・・フライ、さめちゃうでしょ。早く座って」

母は、レタスやトマトとともに白い皿にのせられている、エビのフライがさめることを気にしているばかりだ。

よかった・・・

「いただきます」

手を合わせるのもそこそこに、僕は何か感づかれやしなないと、内心びくつきながら、「ご飯を口に押し込んだ。ろくに噛みもしないで飲み込む。早くここから逃げ出したかった。

「ちょっとヒ口ったら、ちゃんと噛まないで胃を悪くするわよ・・・あまり噛まないで食べるところはお父さんそっくりなんだから・・・なんでこういうところだけ似るのかしら・・・ちょっと!」

突然、声のトーンが上がった。

「なんですか! そのお茶碗の持ちかたは!・・・ったく、小さい時から言ってるのに、もう情けないったら・・・」

母が、行儀作法のことであるさく言っている間はまだ安心だ。

自分がちょっと茶道の師範級だからって、いちいち細かいことまで逐一注意されてきた僕は、それが本当に有難いのか、それとも、うるさくガミガミ言われて、単に有難迷惑なのか、今はまだまったくわかっていなかった。

「はいはい・・・」

適当に返事をしておく。

僕だって、茶碗の横から、親指と人差し指、中指の三本だけで掴み持つ、ご飯茶碗の持ちかたが良くないってことくらい、わかっている。でも、友達のなかじや結構こういう持ち方してるヤツは多いし、自分だけ妙に肩肘張ってるっていうのも、何かと付き合ひ上、困るんだよね・・・

「大丈夫、お茶席のときはちゃんとやるから」

「まあ！ 普段からやっていることがウツカリ出てしまうから行儀つてのは怖いんですよ！・・・まったくもう・・・秋のお茶会にはお姉ちゃまと揃って来させなさいってお師匠さんに言われてますからね、頼みますよ」

「はいはい・・・」

お茶会か・・・

なんで僕まで。

お姉と一緒に行ってきたらしいのに。

「お師匠さんが、あなたにどうしても引き会わせたい女性むすめがいるんですって。だから・・・何でもいいから行儀だけは良くしてよ」

そついう訳・・・。

何でもいいけど、別に興味ないし。今は、読まなくてはならない本が山ほどあるし。

それに・・・。

僕は女の子を楽しませるような会話ができるタイプじゃないから、紹介されるだけ無駄。

去年も一回そういうことがあった。世話好きな親戚のおばさんの紹介だ。

会ったこともない女の子と、喫茶店に二人で入って、コーヒー頼んで、「今日は暑いですね」とか、適当な話でその場を濁す。

女の子はたいていダンマリだ。いいところのお嬢さんだからか知らないけど。

間が持たないから、しょうがない。僕の専門の話になる。熱が入ると僕は止まらなくなるから、いつの間にか、女の子は引き気味になって、それで「あなたは私にはもったいないです」とか何とか言われて「さよなら」だ・・・

「それからその髪、切りなさいよ。秋までには」

え・・・なんで。いいじゃん。

まさか七三分けにしろとは言わないだろうな。

パン屋のバイトだって出来るくらいの長さなんだから。それに。

自力で彼女も作れないんだから、髪くらい伸ばさせろってんだ。

それでもしなきゃ本当に・・・

「バイトはちゃんと仕事、出来てるの？ お給料もらうんですからわからないことはちゃんと聞くのよ。あ、そうそう、今日、何時に帰ってた？ 早く帰ってきてるなら洗濯物くらい取り込んでくれればいいのに・・・気が効かないわね・・・そんなんじゃ今どきの女の子は気に入ってくれないわよ」

「バイト」・・・

「何時に帰ってた」・・・

ドキンとした。

バイトの帰り道に出会った、あの凜々しくも、眩しいあの人の姿。

そして、にわかに朦朧として帰ってきた誰もいない家。

シャワーを浴びて、二階にあがって・・・

そして・・・

「・・・浩明ったら。聞いている？」

ハッと気づいて目を上げると、母が椅子から立ち上がってこちらを見下ろしている。

「え・・・？あ、あの、ごめん」  
咄嗟に謝っていた。

「なんで謝るの・・・ああ、洗濯物を取り込まなかったこと？  
そんなのこれからやってくれればいいことよ・・・ま、やってくれ  
るかどうか甚だ疑問ではあるけどね。それより、コーヒー、いるの  
かどうか聞いているの！」

「あ・・・ああ。いります・・・」

母はちよつとため息をつきながら、食べたあとの食器をガチャツ  
かせながら、シンクに持っていった。

「あら、コップ・・・私、洗い忘れたのかしら・・・いやあねえ、

年取ると。こんなわかりやすいところに置いてあるのに気づかないなんて……」

……僕はまたドキンとした。

しかしコップは見る見る間に、真っ白な泡に包まれた。

そして、透明な水流と、そして母の手で、コップが綺麗に清められていく。

ガラスがまた光り輝いて、洗いカゴの中で憩う……

それを見ていた僕の心は、少し軽くなった。

母の入れてくれたアイスコーヒーが、とても美味しく思えた。

今夜という今夜は、読みかけのあの本を完読しなければ……

でない、明日のデイベート・クラスで大恥かきそうだ。

徹夜だな……今夜は。

さっきのどんよりとしていた僕とはまったく違う自分がいる……

「今日、どうしても読まなきゃいけない本があるから、電気がつい

てても『早く寝なさい』とか言わないでよ」

「はいはい……」

「はいはい」とため息混じりに吐き出すのは、今度は母の方だった。

## 蝉

夏の夜は、突然の出来事に胸をびくつかせることがある。特に、セミが泣き叫ぶような鳴き声をあげて、何かにぶつかつたりする音は、まるでホラー映画のようだ・・・

「今何時だ・・・」

見ると、1時を過ぎていた。朝まで読むとして、あと6時間か・・・。細かい字でかかれたハードカバーの教授の著書は、やっと半分を過ぎたところ。あと6時間ばかりで読破できるものではないことは明々白々だ。でもまったく準備無しである教授の授業に臨むことは、赤っ恥を覚悟しなければならなかった。というのは、学内でももっとも広い教義場を借りて、デイベートの授業をするのだから。どうやら、ハーバードの「白熱教室」をもじっているものらしい。

アメリカからの輸入ものだとしても、僕は歓迎していた。僕だけではない。仲間もだ。それで、その仲間達と一緒に、息せき切るようにそのデイベート・クラスをとろうと話していた。いつかテレビで見た「白熱教室」が自分の大学でも受けられるのだ。胸躍る気分だった。

あの学問的興奮が最高潮に達する、まるで古代ギリシャのアテナイの学堂でソクラテス、プラトン、そしてアリストテレス達が議論を行なったように、僕たちもまた、学問の海にどっぷりと浸かることができるのかと思うと、ハーバードの超有名教授の授業ではないにしても、そのデイベートの授業が待ち遠しいような、それでいてそんなに早く来て欲しくないような、複雑なドキドキした気分で、いつも授業の前夜は過ごしていた。

しかし。

その準備にかかる時間と労力は並大抵ではなかった。普通の一般

教養の授業なら、何も準備などしなくてもいい場合も多い。でも、あの「白熱教室」様の授業が受けられるとあって、学内の多くの学生がその授業をとっていた。だから、教授の本を読まないでその授業に出たりなんかしたら、突然のご指名になんと答えればいいのか準備をまったくしていなかったら大恥もいところだ。

それに、準備が足りていないことくらい、教授には、僕がちよつと喋り出したところで、すでにもうまるわかりだろう・

そんな緊張感もさることながら、万が一、その多くの学生の中から奇跡的にも当てられてしまったときに、どのような答えを返せば恥をかかなくて済むか、そればかり考えてしまうのだった。結果的に、その教授の著書にはすべて目を通しておく・・・という、いかにも模範的な学生生活を送れているのは、感謝しなければならぬけれど・・・

もうひぐらしの声など微塵も聞こえない、かといって、まだ虫の声も聞こえてこない真夏の夜の静寂しじまにたゆたいながら、僕は目覚まし時計を眺めるともなく、疲れた頭でしばらくぼうつとしていた。扇風機からの風が、時折、本のページをめくろうとしている。けれども、少し離れたところから運ばれてくる弱々しいその力ではどうすることもできない・・・紙がペラン、ペラン・・・とただ無機的に動くのを感じていた。

すると、突然、

「ジジジ・・・!!」

という、耳をつんざくような音がしたかと思うと、僕の部屋の網戸の枠に、

「カツン！」

とぶつかった。そのすぐあと、網戸のすぐ下のほうにあるプラントー置きに落ちたと見えて、

「ジジジ、ジジジジ・・・!!」  
と、それがやかましくなきわめくのである。

僕は網戸を開けた。プリンター置きにはひっくり返って起き上がれないでいるセミがジジジ、ジジジとなおもやかましく鳴き立てている・・・

僕は鉛筆の先で、セミが引っくりかえるのを手伝ってやった。すると、ジジジとやかましくいうのはやめて、そこに一瞬佇んだかと思つと、サツと透明な羽をひろげて、どこかへと飛び去ってしまった。

あたりはまたもとの静けさに戻る・・・

何もなかったかのように、本のページがペラン、ペラン・・・と風に煽られている・・・

こんなことをしてはいられない。あと何時間かで夜が明けてしまう。早く読み進まなければ・・・でも、どうしたってこんな分厚くて、字の細かい本は朝までにすべて読めそうもない。

当てられないことを祈つて、もう寝てしまおうか・・・

いや、それをやったら、ここまで読んできたことが台無しだ。できる限り読み進むのだ。付け焼刃で理解に乏しかったとしても、字を追いかけておくだけでもまだましだ・・・

僕は眠気がきて重くなりつつあるまぶたをこすった。階下へ飲み物を取りに行こうとして、階段の電気を付けた。両親も姉も、この時間ならすっかり寝込んでいる・・・

僕は足音を立てないようにそろそろと降りていった。降りたところから廊下が二手に別れている。ひとつは、ダイニングに行く廊下、もう一つは玄関に通じる廊下だ。

玄関への廊下の途中には小窓があつて、そこから表の道路の様子がなんとなくうかがえるようになっていた。来客があつたとき、インターホンだけではよくわからない、という時がある。そんな時には、その小窓から覗いてみたりもできるから便利なのだ。

その小窓から今夜は、なんだかこんな時間帯に似つかわしくない、妙な様子が伝わってきていた。何だろうと思つて小窓の網戸に頬を寄せて見ると、おじさんとおばさんが道路にいる。そして、何やら困つた風に下を向いて、ヒソヒソと話しているのだ。

僕は音を立てずに鍵を開け、玄関のドアのレバーをそつと押し下げ、外に出た。何事なのかよくわからないのに飛び出しては具合が悪いこともあるだろう……

「……どうしたものかしらね……」

「こんなところで……夏とはいえ、風邪引くぞ」

「いつたい、どこの誰かしら……」

植木に隠れて次第に近づいてみると、隣家の外灯に照らし出されたのは、向かいの家のおじさんと、その家の隣に住むおばさんだった。

「こんなことでわざわざ警察に言つていつのも何だか……」

「厄介なことですね……」

誰のことを言っているのかと思つて、その二人が見ているほうをそつと木陰から覗いてみた。

男？……女？……

ジーンズを履いているし、髪の毛は肩よりも少し長い。どっちとも性別は明言できない。

その人は、隣家の壁にもたれて片足を前方に投げ出し、もう片足は「く」の字に曲げられて道路にペタンと倒れるようになっていた。目は閉じられていて、眠っているようだ。

その時、医師をしているという近所の人の乗るBMWが、手術でも長引いたのか、今頃帰ってきた。おじさんとおばさんは、ちよつと心持ち、道の端に体を寄せた。

その車のライトは、座り込んで眠っているその人の顔を、一瞬、照らし出した。思わず僕は、「あつ」と声をあげそうになった。

「あ、あの！」

僕は夢中で飛び出していった。おじさんとおばさんは、突然の大声に心底びっくりしたように、こちらを振り向いた。

「そ、その人、ぼ、僕の、せ・・・先輩です・・・！」

「・・・ええ？・・・そうなの？」

「・・・君の家って・・・すぐもうここでしょ？」

おじさんとおばさんは、ちよつといぶかしがっていた。

僕は慌てて、

「あ、先輩からさつき連絡があつたんです。の、飲みすぎて帰れなくなつたから、泊めて欲しいって。で、連絡待っていたんですが・・・その・・・よ、酔っているから・・・家が・・・そう、家がわからなくなつたんじゃないかなと・・・ああ、それで僕様子を見に今・・・」

「おじさんとおばさんは、それでも納得してくれて・・・というか、この厄介な客人の引き取り手が現れたことのほうが嬉しかったと見えて、早々に引き上げていつてくれた。」

僕は、その人に歩み寄り、いかにも介抱してやるような振る舞いに見えるようにしていた。なぜって、おじさんとおばさんが、それぞれの自宅の門柱のところでまだ様子を伺っている風だったから。

それでわざと、

「先輩！先輩だったら・・・もう、酔うとすぐこんなになっちゃうんですから、もう・・・ほんと困りますよ・・・」  
などと言ってみたりした。そんな言葉でこの人が起きてしまったらどうしよう、という心配もなくはなかった。それでも、目を開けなかったから助かった。

そうこうしているうち、さっきのBMWもすでに車庫に入っていたし、おじさんとおばさんもすっかり姿を消して、外灯もいつの間にか消えていた。あたりを、暗闇と静寂が包んでいた。少し向こうで街灯がポツンと一つ、照っているばかりだ。

僕は、ポケットから携帯を取り出し、そのライトで照らしてみた。間違いなかった。

白いコットンのTシャツ、ジーンズ、裸足にモカシン、肩までの金茶色の髪・・・

昼間会った、あの人だった。

## 東雲（しのめ）

なんて僕は馬鹿なんだろう・・・

僕の頭に再び静寂が戻ってくると、この人と二人きりになれた喜びは一瞬のうちにとこかへ行ってしまった。遠くで僕をあざ笑うかのように吠えている犬の声が、暗闇の中からやってきた・・・

僕は、大きなため息をついた。あれほど、読まなくてはならないと切羽詰って読んでいた本を放つたらかして、今、僕はこんなところであつたい、何をしようとしているのか。

そして、この人をどうしたらいいのか。

さっきのおじさんとおばさんに「この人は僕の先輩です」と言った手前、とにかく、ここでもたもたしてはられない。家族が起きてきても困る。寝静まっている今のうちに早く僕の部屋に運ぼう・・・

背中におぶって行こうと思うが、一方の足が投げ出されている。これでは、つかえておぶえない。しかたなく僕は、その足を「く」の字に曲げようとした。

初めて、この人に触れる・・・

初めて触れる場所が足ではなくて、もっと別の、この人のもっと素敵なところであつたらよかつたのに・・・という念が僕の心に浮かんだ。

それで、気づいたら、その人の唇に自分の人差し指を触れさせて

いた。  
そうっと。

触れたということが、お互い、わからないくらいに、そうっと。

思いを遂げたあと、今のを誰かに見られてやしないか・・・と急に心配になって、辺りを見回す。

でも、誰もいなかった。

遠くの犬がまた、馬鹿にしたように、一声、吠えただけだった。

急がなければ・・・

足をくの字に曲げる。

細かった。痩せていて、骨格が感じられた。

僕も割と細身なほうだが、僕よりもか細い感じがする。

脇にだらりと下げられている手首をとった。

ひんやりと冷たい。手首も僕なんかより細い。

片手の手首を僕の肩におき、もう一方の手首を手で探す。

探しているうちに、その人にじりじりと近寄っていった。

あった・・・もう一方の手首をつかんで、肩におく。

とその時、僕はその人の両足の間に自らの身を置いていることに気づいた。

こんな近くにいるなんて・・・

信じられなかった。

でも、僕はこの人がいったい誰なのか知らない。

この人も、僕がいったい何ものなのか、知る由もない。

目が覚めて気づいたら、何て思うのだろう。  
僕をどう思うのだろう・・・

そんな不安をぬぐい去るように、足と腰に力を込めた。  
その瞬間、その人の髪が僕の頬にかかった。

絹糸のように見えたその髪は・・・  
触れてもやっぱり、冷たく、そして柔らかで、絹糸そのものだ・

骨格が細くても、大人なんだからそれなりに重みがあるのではと  
思っていた。

なのに、まるでこの人が眠りながらも僕を気遣ってくれている  
のかと思うくらい、軽かった。

とはいえ、ずり下がってきたり、落ちたりしたら厄介なことにな  
ると思つて、背負い直す・・・

とその瞬間、その人の肺が僕の背中に一瞬強く押し付けられたの  
か、小さなため息がその人の口元から漏れ出た。

その吐息が、僕の黒い、男然とした髪を通して、耳元にまで届い  
たかのようで、僕は暗闇のなか一人、顔を熱くしていた・・・

自宅の門の内側から扉を閉める。

施錠なんか形だけにとどめて、今はこの人を落とさないようにす  
るのが最優先だった。

それに、施錠の音で家族の誰かが起きてこないとも限らない・・・

とはいえ、よしんば家族が動づいて起きてきて、この現場を見つ  
けられてもどうってことはなかったのだ。

さつきおじさん達に言ったことと同じことを、家族にもいえないことだ。

先輩だといえ、別にやましいことをしているわけでもないし、倒れている人を介抱するのは悪いことではない。

でも・・・

嫌なんだ。それじゃあ・・・

だって・・・

僕の大切なものが壊れてしまいそうに思えたから。

庭の樹木達がさらさらと葉音を立てる・・・

裏の林の木々達もざわざわと揺れうごめいている・・・

遠くの犬がまた吠える・・・

今だけ。

今だけはお前たち、僕の足音を消しておくれ・・・

僕が首尾良く、この人をベッドに寝かせてしまつまで、僕の歩くすべての気配、この人の息するすべての気配を消しておくれ・・・

玄関の施錠も音なく、うまくいった。

サンダルを脱ぐのに手間取る。素足の冷や汗がゴム製のサンダルにくっついて、離れないのだ。

やっと離れた・・・と思ったら、弾みで少し遠くへ飛び、パタン！という物音を立てた。

ドキつとして、慌てて耳を澄ます・・・

階上の誰にも動きはないようだ・・・

よかった・・・

廊下をひと足、ひと足、ゆっくりと歩く。

それでも、なんとなく足音が響いているようで気が気ではない・

「少し摺り足で歩いたほうが、埃を舞いたてずに済みますし、乱暴な足音も立てないで済むのですよ」・・・

母の茶道のお師匠さんが、粗野な中学生だった僕に教えてくれた言葉が、突如脳裏に浮かぶ。

本当にそうだ。

摺り足で歩いたほうが、足音もなく、しかもずっと楽に歩ける・  
こんなときに茶道が役に立つとはな・

問題は、階段だ。

早くこの人を二階の僕の部屋に隠したい。

でも階段を上げれば上がるほど、同じく、二階に寝ている両親と姉の部屋に近づくことにもなるのだ・

拷問のようだった。

一段上がるたびに、心臓の鼓動がトーンアップしていく。

この人が軽くてよかった。

重かったら、階段なんて登れやしない・

やっと階上まで到達した。

精神の高揚感と身体的な疲れが一緒になって、息切れしている。

でも、その息の音が家族に聞こえていそうで、気が気ではない。

すぐ右のドアが僕の部屋だ。

早く早く・・・と急ぐ気持ち先立つ。でも、最後の最後まで  
気を抜いちゃいけない・・・

ドアノブのレバーを慎重に押し下げる。そしてそのままドアを中  
へ少し押す。レバーを勢い良く離してしまわないように、また慎重  
に戻す。

ゆっくり摺り足で部屋に入る。

この人の足に、部屋に置いてある諸々のくだらない僕の所有物が  
当たらないよう、慎重に向きをかえて、ドアのほうに向き直り、ま  
たレバーをゆっくり押し下げて物音一つしないようにドアを閉める。  
・  
・

「ミッション完了・・・」

思わず呟いた。見ると、飛び出たさっきの状態のまま、机の  
上の蛍光灯は明明と灯り、本は扇風機にペラン、ペラン・・・と煽  
られ続けていた。

やっと二人きりになった。

ゆっくり、ベッドに腰を下ろす。

その人の手首を離さないように、僕だけ向き直り、その人の背中  
を支えるように横にならせる。

両足をベッドに上げようとして、気づいた。

靴を履いたままだったのだ。でも、そのほうがよかった。

靴があったら、家族にすぐバレてしまう・・・

モカシンを脱がそうと思って、足首をもつたら冷たくて、細かつ  
た。

そして、脱がしてみると、白くて滑らかな肌と、爪をすべてきち  
んと切つてある足指が現れた。

足の形も細い。

足袋を誂えるんなら、この人は一番細い笹型で充分だな・・・

脱がしたモカシンを僕の机の下に隠し置いた。

そして、ブランケットを胸のあたりまでかけた。

その人は、まだ眠っていた・・・

僕は机の前に座り、読みかけのさっきの教授の本を読み出した。  
でも・・・

一ページも進まないうちに、僕は肩越しにベッドを見つめていた。  
ベッドに寝ているあの人の唇にもう一度触れたい・・・という思  
いが頭をもたげて離れない・・・

椅子から立ち上がり、ベッド脇に立ち尽くした。

おもむろに膝をつくとき、さっきみたいに人差し指で唇に触れた。  
そしてその手で、さっき僕の頬を撫でていった絹糸の髪にも触れ  
た。

ほのかに、柑橘系のオーデコロンの薫りがした。

そうしてやっと、僕は机に向かうことができた。

これで、太陽が昇って明るくなって、冷たく別れることになって  
しまっても、たとえ罵倒されても、悔いはないだろう・・・

本は、朝までに完読にはいたらないだろう・・・  
だが、読めるだけ読んでおくのだ・・・

あたりがほの明るくなってきていた。

ベッドを見ると、あの人が小さく寝返りを打った。

ブランケットがはだけて背中が見えているのを認めた僕は、それ

を直して、そしてまた本に戻った。

その朝一番の早起きの蝉から、一匹また一匹と、今日の始まりを告げるかのように鳴き始めていた。

## 覚醒

「ジリリリリリリ・・・」

・・・時計を見なくても、朝、お姉の部屋からけたたましくあの目覚まし時計のアラームが鳴ってくれば、ちょうど7時だったことは、姉貴が社会人になった五年前からのうちのならわしだった。

姉貴の部屋のドア、そして廊下、そして僕の部屋のドアをつんざいて聞こえて来る。まだ僕の部屋は廊下を挟んでいるのでそれほど被害はないけど。ただ、ぐっすり寝てさえいれば、の話だが。

可哀想なのは、両親だ。両親の部屋は姉貴の部屋のすぐ隣なので被害は甚大なのだ。今では、「やかましい」「早く起きろ」と叱るのを諦めて、同じその目覚ましで起きる習慣がついたくらい。

目覚ましは止まった。ばかでかいアラームを耳元で聞いているのは姉貴のほすなのに、颯爽と起きてくるのは両親のほう・・・

今朝もそうだった。

まず両親の部屋のドアが勢い良く開く。十分後くらいに姉貴の部屋のドアが不機嫌そうに開けられる・・・朝が弱い姉貴のこと、アラームを止めてそのまま寢床でダラけてるんだろ・・・

そんな家族の気配を感じながら、僕は本の活字を追っていた。

正義と倫理のせめぎあいを読くと面白くも面白くないところに差し掛かってきていた。アラームの音は気になっても、活字から目を離さずにはいらなかったのだ。

でも、ああ七時か・・・もうあと一時間もあれば最後まで読めるのに・・・なんで読めなかったのだろう・・・こんなに面白いんだから徹夜したら、全部読めただけなんだけど・・・

なんで・・・？

と、思った瞬間、はっと我に返った。

そうだ・・・

突如、僕は振り向いた。肩越しに見えたのは、僕のベッドで寝ている誰か・・・だった。

金茶色の髪の毛の束がいく筋か、紺とグレーのボーダー柄の枕カバーの上に垂れている。白いコットンのＴシャツに覆われた細い肩がブラケットから覗いている。

僕はこの状況にしばらく呆然としていた。

「ヒーロー、朝ごはん食べないとー、遅刻よー」

母の声だ。

ドキっとした。この人を置いて、階下に降りていっていいものかどうか。

いや、それは危険すぎる。

両親や姉貴は、朝食を食べたあと、着替えたり化粧したりしに、また二階へ上がってくるからだ。そのとき、ウツカリ僕の部屋を開けたりでもされたら・・・

それに、朝食をとり家族に会えば、ベッドに寝ているあの人の夜中の一件を話さないわけにいかない・・・

「ヒーロー！・・・まったく今朝はどうしたってのかしら・・・」

母がぼやいている。そして・・・

階段を上ってくる足音が聞こえてきた。

頭が真っ白になった僕は、思わず、ベッドの足元にクルクル巻きにして放ってあった、多少埃にまみれているベッドカバーをひつつ

かんだ。

そして、それをぱつと広げて背中に回すとそのままベッドにダイブした。

ギシギシとベッドが揺れた・・・

と、同時に僕の部屋のドアがノックされ、母が顔をのぞかせた。

「ヒロ・・・どうしたの？具合でも悪い？」

と言いながら、部屋に入ってくる・・・

うわ・・・

隣の金茶色の髪がのぞいてませんように、そこで、隣に寝てる」の人が見つかりませんように・・・！！

「あら！ それ、ベッドカバーじゃない、ブランケットあったでしょ？ なんでそんな埃まみれのを着て寝てるの・・・ちよつとは部屋の掃除しなさい、もう・・・」

ますます近づく・・・

もうだめだ・・・

「まあ！」

・・・やっぱりな・・・

「これ、デイヴィッド・深川先生の？！」

・・・は？・・・

「あらまあ・・・こんなに立派になられたのね・・・」

・・・何？・・・

「ヒロ・・・こんなに素晴らしい先生の授業受けられるなんて幸せよ、すっかりやんなさい。あでも、具合悪いんなら冷蔵庫にある薬

飲んで、休むのよ。無理しちゃだめですからね・・・あら、もうこんな時間！」

母はスリッパをパタパタ言わせながら部屋を出ていき、ドアをそっつと閉め、出かける支度をしに自分の部屋へ行ってしまった。

・・・命が縮まったよ・・・ったく・・・

とはいえ、自分のまいた種なのだ、母は何も悪くない。

でもさっきの言葉は一体どういう意味なんだ・・・

デイヴィッド・深川先生は確かに僕がとっているデイベートクラス  
の教授だけど・・・

ああ、そうか、机の上に置いてあるあの本を見たんだ・・・

それにしても、なんで母が先生を知ってるんだろう・・・

「こんなに立派になられて」・・・だって？

ぼうつとした頭で考えていると、なんだか僕の左脇がじわつと汗ばんできた。

切羽詰ってベッドにダイブしたのはいいが、なんとということだろうか、この見知らぬ華奢な人の背中にかなり密着していたのだ。というより、ベッドに飛び込んだとき、もしかしてこの背中にかなり衝撃を加えてしまったかもしれない・・・

でも、まったく反応がなかった。

それは今の僕にとっては非常に有難いことではあるが・・・

そんなに飲んだのだろうか・・・

にしては、それほど酒臭いわけでもないし・・・

起き上がろうとすると、またドアがノックされた。

おっと、やば・・・

また枕の端に顔を沈ませる。

隣で寝ているこの人の綺麗な髪を、もしかして引っ張ってしまった  
ているかもしれない・・・

「今日、お父さんもお母さんも遅くなるから・・・お姉ちゃんはどう  
うかしらね・・・ま、また連絡入れるから。ちゃんとご飯食べなさいよ、じゃね」

ドアが音も無く閉められる。

またも、ぼうつとして枕の端に頭を休めていると、まず、父の落ち着いた足取りが階段を降りていく音がした。

次に母の軽い足音。

しばらくすると、お姉の部屋からバタバタという騒がしい音がして、部屋のドアが開け放たれ、階段を駆け下りていく・・・

ほどなく、「ボタン」と玄関ドアが閉められ、外から鍵をかける金属音が響いた。

長い、ため息をついた。

さっきからの極度の緊張と、徹夜の疲れでそのまま眠ってしまっ  
そうになった。

目を閉じていると、柑橘系のいい匂いがする・・・気持ちがいい・・・

「うう・・・ん・・・」

脇から声がした。  
でも僕は極度に眠たかった。

僕の脇腹のあたりで、もぞもぞ動いている気配があった。  
でも僕はうつぶせになったまま、目を開けられないでいた。

昔、猫飼ってたな・・・

暑い夏でもお構いなしにベッドに上ってくるんだから・・・  
まいいや、放っておこう・・・

「あの・・・」

・・・ん？・・・

「すみません・・・」

・・・猫が？・・・「すみません」？・・・

カッと目を開けた。

体中を血液が激走し出したかのように、飛び起きた。

猫なんて、はなからいない。

その代わりに僕の目の前にいるのは、名前も性別も住所もわからぬ、そして、眩しいばかりのかの人だった・・・

その人はベッドの上に起き上がって、僕を見つめていた。

僕達は二人、ベッドの上に向かい合って、しわのよったブランケットやベッドカバーの間に座っていた。

初めて、明るいところで、しかも、こんな近くで見る・・・  
その人の真後ろにある窓のカーテンを通して差し込む柔らかい光  
のせいで、まるで後光がさしているかのように見えた。

この人は・・・

黄色人種だけど、純粋なそれじゃない・・・

クォーターか・・・白人系の血が混じってるな・・・

それで、こんなに色が白くて、鼻も高いのか・・・

見つめられていることに改めて気づいた僕は、この人に会ってか  
ら今までの自分の心、すべてを見透かされているように思われて、  
耳まで赤くしてうつむいた。

モカシンを脱がしたときに見た足の色の白さを見て、ちょっと欲  
情してしまったことももしかして、この人はわかっていているんじゃない  
かと思うくらいに、この人の目はまっすぐだ・・・

「・・・あの・・・ここは・・・」

真正面から話しかけられて、ちょっとビクつとした。

でも、何だか深みがあつて、僕はその声で何だか落ち着けた。そ  
れは、聞いたことのあるようなないような、それでも懐かしいよう  
な、そんな声音だ・・・

「ぼ、僕の家です・・・」

・・・言いながら、初めて交わす言葉だというのに、我ながら心底  
アホらしく思えて心身ともに羞恥にまみれた。

「・・・おそらくそうでしょうね・・・てか、何も覚えていなくて・・・

・すみません、昨夜、何か俺、悪さしました？君に・・・その・・・朝からは言いづらいようなことを・・・」

「なッ・・・何も・・・」

ドキンとした。

それは・・・

この僕のほうです・・・

あなたが寝ている隙に、あなたの唇や髪の毛を触ったりしました。

・・・すみません・・・

「じゃ・・・一緒にベッドに寝ているのは・・・？」

「アッ・・・そ、それは・・・あの、母に見つかってはいけないと・・・いや、さっきだけの話です。もう、家族は誰もいませんから・・・アッ、夜中、僕はずっとあの本を読んできましたから、あなたは一人でそこに寝てました！ うん、一人つきりで！」

「・・・じゃ、なぜ俺はここに・・・」

まったく覚えてないんだな・・・

「あの、ご自宅はこの近くなんですか？・・・あ、ここは宗苑通り2丁目ですが・・・あなたはその道の脇で倒れていて・・・」

「宗苑通り2丁目・・・ああ、俺がいつも抜け道で通るところです・・・俺の家は林のもつと向こうで・・・」

と言いかけたが、おもむろにその人は、頭を片手で抑えた。

「・・・偏頭痛持ちでね・・・薬を・・・あまりの辛さにちょっと余計に飲んで・・・昨晩は自転車も乗るのが恐いくらい朦朧として

きて、それで歩いて帰ってきたんだけど・・・こんなじゃピアノも満足に弾けやしない・・・」

ピアノをやってるのか・・・

「あの・・・遠慮なく横になって下さい、お水でも持ってきてまじょうか」

「・・・悪い・・・」

その人は、辛そうに顔をゆがめながら、またベッドに沈み込んでいった。

僕は、ブランケットをかけなおしてやって、そのまま階下へと降りていった。

そうか、薬の量のせいで、あんなに爆睡してたんだ・・・原因がわかってよかった。

とはいえ、この分じゃ今日の講義は全休かな・・・

それでも僕はよかった。

あの人と少しでも長く一緒の空間で過ごせるほうが、嬉しかったからだ・・・

そして、今頃気づいた。

「俺」って言ってたな・・・

男か・・・

あんなに細くて・・・

それにしても。

あの偏頭痛の辛そうな状態はどうしたものか・・・



## 添い臥し

階下へ水を取りにいくと、夏の眩しい太陽の光は、もうすでに高くあがっていて、日よけで遮られていた。

ダイニングはほの暗く、ひんやりとしていた。さっき、家族がつけていたエアコンの冷気がまだ残っているのだろう・・・

浄水器から水を出す。

コップ・・・と探すと、僕が昨日の夕方使った、あのコップが目にとまった。

母が綺麗に洗ってくれて、まるで清めてくれたかのように見えたのに・・・

今、こうして、考えも及ばなかった事態に発展して、家族の誰にも内緒で、あの人を二階に寝かせている。

そのことを思うと、あろうことが、また体の芯が熱くなりだすのを認めざるを得なかった。

・・・いや、今はそんなことを考えている場合じゃない・・・  
人が痛みに苦しんでるってときに・・・

もしかして、冷蔵庫のなかに鎮痛剤があったのではないかと思っ  
て、探してみる。

母がいつも、病院の薬の残りを入れているプラスチックケースを見つけた。そのなかには、薬と、それから薬局でもらう、薬の詳細が記された用紙が、きちんと症状別に整理されて、クリップで止められていた。

「鎮痛剤」と書かれた付箋がはつてあるところを見てみると、「ロキソニン」という薬の詳細があった。早速、それをケースのなかにさぐすが、もう誰かが飲んでしまったと見えて、一錠も見当たらない・・・

しかたないので、水だけ持って二階へあがる・・・

そう・・・あのコップに注いだ水を持って・・・

ドアをそつと開けると、彼は・・・今ではそう、男だと判明したのだから・・・その「彼」は、向こうを向いて横になっていた。

僕が部屋の中に入ると、今日はちょっと蒸し暑いような気がした。あすは雨になるのだろうか・・・

だからって僕がいつもやっているように扇風機を「強風」にモード切り替えして、直接当たる、っていうのも、病人には酷だ・・・

僕はエアコンにスイッチをいれた。

網戸になっている窓のガラス戸をしめなければ。

机の前の窓と、それから・・・彼が寝ているすぐ上の窓・・・

僕は、ベッドのヘッドボード側に回り込んで、ゆっくり窓を閉めた。  
ふと見ると、寝ている彼の顔が見えた。

若干、眉間に力が入っているようだ・・・そんなに痛いのだろうか・・・

「偏頭痛」ってよく聞くけど、僕はそんな経験がないから、苦しそうにしている彼をどうしてあげたらいいのか、わからない・・・

「・・・うん・・・」

彼の顔をじつと見ていたら、それに反応するように急にうなされたので、僕はビクつとした。僕の心配がこの人をよりいっそう苦しめているように思える。

あえて、あまり心配しないようにしたほうがいいのかもしいない。  
・  
・

さっきの本の続きでも読もうと思って、ベッドの側から離れようとした。

せつかく寝ている人を起こしてまで、もってきた水を強要することもないだろう・・・

すると、彼が寝返りを打った。

痛みから来るのか、少し半開きになった口元から小さく、そして長く息を吐きながら。

そして、ブランケットの中にあっただ片腕を出して、頭の上にやりながら、仰向けになった・・・

僕は・・・

不謹慎なやつだろうか・・・

半開きになった唇の、その桃のような膨らみ・・・

ブランケットから出された腕の裏の、日にも焼けていないマシユマロのようなすべらかさ・・・

眉間に集められた感情の極まりのような表情・・・

それらが一つとなって、僕の欲情に火をつけようとしているかのよう・・・

いや、そんなことを考えるなんて。

やっぱり僕は不謹慎な、馬鹿なやつだ・・・

頭を振るようにして、机に向かう。

本を無造作に取り上げ、さつき読み進んだページを探しながら、  
繰っていく・・・

エアコンの風が僕の頭と体を冷やすように撫でていく。

さっきのページがあった。

でも、さつきみたいにな面白く感じられない。

同じページなのに。同じことが書いてあるのに。

何なんだ、この違いは・・・

全然、面白くない・・・

それでも、読み進む。

仲間の奴らは授業で今頃、ここをやってるかもしれない・・・  
面白くないからって自分だけわからないなんて悔しい・・・

「・・・んん・・・」

しばらくして、またうなされている声が聞こえた。

椅子から思わず立ち上がる。

大丈夫なのか・・・

病院に行かなくてもいいのだろうか・・・

「・・・大丈夫・・・ですか・・・」

思わず声に出していた。

彼は、はっとしたように、目を開けた。

すぐには、僕が誰なのかわからない様子で、僕をじっと見つめていた。そのうるんだ瞳に、また僕は頬を赤く染めた。

「……ああ、君か……」

「……あの、うなされていたようだったので……つい……」  
彼は、頭の上へ上げた腕で、顔を被った。白い二の腕の裏側が眩しかった。

「厄介なことになってすみません……今何時ですか……」

「いえ、休んでくれていいんです。休んでください……てか、  
いてくれたほうが……僕は……そのなんというか……」

無意識な発言をしている自分に途中から気づいて、最後の方は小さな声でうやむやになっていた。

そんな僕の様子に、彼はフッと表情をなごませた……と思うと、  
また辛そうな顔に戻っていた。

「……ありがとう……たぶん今9時か10時……そんなところかな……」

「あ？……はい。そ、そうですね。えっと……9時5分です……」

僕は、椅子に座り直して、机の端に置いてある目覚まし時計を見ながら、言った。小学生のときから使っている、淡い水色の小さな目覚ましだ。

「……本当に悪い……」

「あの……薬はまだあるんですか？ 水は持ってきましたけど……」

「

僕は、あのコップを見やりながら尋ねてみた。

彼はそれを聞くとため息をついた。

・・・とても辛そうに。

「薬があつたら・・・すぐにでも飲んでるんだけど・・・昨晚飲んだやつが最後で・・・」

「鎮痛剤、買ってきましようか」

「・・・市販のは合わないんだ・・・体質に・・・。あの今、9時だったよね・・・」

「あ、はい・・・それが何か・・・」

どうしてさっきから時間ばかりを気にするのかわからなかった。もしかして今日、何か大事な予定があつて、ここでもたもたしてはられないのか・・・

僕は、心無しか、チクリと胸が痛んだ。

「・・・ああ・・・あとそうだな・・・3時間くらいここにいさせてもらえたら、治まるはずなんだ・・・」

偏頭痛つてそういうものなのか？

僕は、経験がないからまったくわからない。

でも、あと3時間はここにいてくれる、という確証をもらったみたいで、僕は密かにほっとした。

そして、嬉しかった・・・

本当に、不謹慎だけど・・・

「あの……」  
彼が唐突に言った。

「あの……本当に世話かけてばかりで悪いけど……」  
「あ、はい、何でも言っして下さい」

「……抱いてくれる？」

……

……は？

……「抱いて」？

「……やっぱりダメだね……勉強してんだもん……君……」  
彼は、苦しそうに喘いで、今度は反対側のこちら側に寝返りを打った。

そして、ふうふうと長くて辛そうなため息をついた。

「アッ、エッ、あの……だ、抱くって……あの……」

「……うん。もいい……会ってすぐの君にこんなこと……  
頼むほうが悪かったよ……」

辛そうに目を閉じて、また眉間に皺がよっていった……

それを見ていた僕は、思わず椅子から立ち上がった。

何をしろと言われているのか、皆目わからなかったけど、この人がそういなら、そうしてあげたほうがいいのかもしれない……

彼の横に添い寝するように、僕は横になった。ギシッとベッドが揺れた瞬間、彼はうつろに目を開けた。そして、そのうるんだ瞳で、少し微笑んだ。

ベッドのギリギリでちょっと落ちそうだったけど、何とか体を滑り込ませた。

「……本当に悪い……抱きしめてくれると……痛みをあまり感じないで済むから……強めに抱いて……血流が頭に行かないように……」

あ……そういふこと……。

ちょっと安心した。

女の子とさえ経験がないのに、うまく行くかどうか心配した自分が馬鹿だった……

「こ、こうですか……?」

「……もつと強く……」

え……

そんなに力を入れたら、あなたが折れちゃいそうだよ……

「……大丈夫……もつと……」

言われるまま、両腕に力を込めた。

偏頭痛ってそういうものなんだ……

脈を打つたびに痛む、と聞いたことがあるな、そういうば・・・

「・・・こんなで、いいですか?・・・」

「・・・うん・・・いい感じ・・・ありがと・・・」

ホツとしたのと同時に、今頃になって、頬がカアッと熱くなってきた。

そんな僕の気も知らないで、彼は気持ちよさそうに目をつむっている・・・

しばらくすると、その人は、すーっと寝息を立ててまどろみの中へ落ちていった。

痛みが収まったのかな・・・

じゃあ、僕はもう抱いていなくてもいい・・・?

そう思ったら、この人と離れるのが切なくなった。

もう一度、抱きしめてみた。

さっきは夢中だったからわからなかったけど、今は違う。

抱きしめると、グレープフルーツのような、クチナシのような匂いが立ちのぼってきて、僕をくすぐる・・・

絹のような金茶色の髪の毛が僕の口と鼻に触れる。

深呼吸をして、その人の髪の毛の匂いを吸い込む・・・

柑橘系の香りの中に甘い匂いが漂ってきた・・・

でも、どうして抱きしめられれば痛みが治まるって知ってるんだろっ。

誰か他のやつにやってもらってるんだろっか・・・

そう思ったら、嫉妬にも似た感情が湧いてきた。  
他のやつに抱きしめられて、安心しきった顔をしている彼を想像  
したくなかった。

もうすっかり寝てしまっているのに、思わず、また両腕に力をい  
れた。

両腕だけでは心配で、全身で抱きしめた・・・

ずっとこのままでいたい・・・

しばらくすると、僕も一緒に眠ってしまったようになっていたようだった。

うつらうつらとして、ふと目を覚ますと、すぐ目の前に見えたの  
は彼の細い肩・・・

指先で左の肩、右の肩・・・となぞってみる。

優しそうな骨格が感じられた。

それだけでは飽き足らず、今度は首筋に添わせてみた。  
すべすべしていた・・・

ここに顔をうずめてみたい・・・

そして、僕の唇で触れてみたい・・・

どうしようもないほど欲情している自分。

そして・・・

それを制するもう一人の自分がいた。

いい加減、馬鹿なことやってるなと思いはじめた僕は、そろそろこ

の人から離れようと思った。

そして、安心しきって、寝入っている顔を改めて眺めてみた。

眉間の皺は消えて、また元の美しい端正な顔立ちに戻っていた。苦しみから開放されたのだ。

なら、よかったじゃないか・・・

今何時だろう。

11時前か・・・

あと、1時間しか一緒にいられない・・・  
だって、偏頭痛が治まったら、やっぱ行っちゃうんだろうし。  
それほど暇じゃないだろうしな・・・

ここから何か繋がっていくんだろうか・・・  
それとも、もうこれでおしまいだろうか・・・

行き倒れていた人。

そして、それを助けた人。

単なるそれだけになってしまっただろうか。

また赤の他人に戻って、見知らぬ他人に戻って。

道で会っても、知らん振りしてすれ違う、そんな風になってしま  
うのだろうか・・・

こんな近くにいるのに・・・

## 添い臥し（後書き）

副題になっている「添い臥し」について説明させていただきます^  
^v

「添い臥し」とは・・・古来、若者が元服した日に一緒に夜を過ごした女性のことをいうそうです。元服というのは、今で言う成人式のようなものですが、昔は15歳が元服を迎える年とされてきました。しかし、甘い夢ばかり見てもいられず、元服を迎えれば一人前の男として、戦場いくさばにも否応なく駆り出されていく・・・という、現実が待っているのですね（ー；）・・・だけに「添い臥し」は、甘美な夢のごとくあってほしいですね・・・^^

ヒロとこの謎の美人さんは、ここではそういうことにはなりません  
が・・・^^；

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7479z/>

---

陽炎 ~ KaGeRoU ~

2012年1月13日14時20分発行